

氏名	津田 道子				
ヨミガナ	ツダ ミチコ				
学位の種類	博士（映像メディア学）				
学位記番号	映博第5号				
学位授与年月日	平成25年3月25日				
学位論文等題目	〈論文〉 映像の中のSubjectとObject				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科）	藤幡 正樹	
（論文第1副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科）	桂 英史	
（副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科）	桐山 孝司	
（副査）	東京芸術大学	准教授	（映像研究科）	長嶋 寛幸	
（副査）	専修大学	教授	（文学部）	貴 成人	
（副査）	青森公立大学	学芸員	（国際芸術センター）	服部 浩之	

（論文内容の要旨）

本論文は、「見ることは何か?」という著者自身の制作活動の中心にある問いに対して、「枠」「鏡」「カメラ」という三つのイメージ生成装置を扱う著者の一連の作品の分析を行っている。これらの作品の大きな要素の一つに、観察者が作品を「見る」ということがあり、本論の中で展開するイメージ生成装置とそれらをめぐるSubjectとObjectについて横たわるさまざまな問題を紐解き、自身だけでなく広く作品の読み解きに応用できるものとするを旨とする。

映像の中のSubjectとObjectを、観察者が作品を「見る」状態や撮影者の存在によって引き起こされるイメージの問題として捉えている。このことを、英文法における「話法」の中の被伝達部の主体の変換、あるいは「関数」における代入といった、構造を記述する形式が作品を分析する中で、観察者の主体と客体のゆらぎを解体する道具になると考えた。まず、SubjectとObjectという言葉が持つ多義性から議論をはじめている。

一つ目は、被写体という言葉の英語訳が文脈によってSubjectとObjectのいずれにもなるということに注目した。撮影して生成されるイメージの主題を指す場合と、イメージに実際に映り込む撮影対象を指す場合の違いから生じている。両者を分けているのは「撮影者」の存在であり、意図やテーマを持った「撮影者」がイメージにおいてSubjectをつくるのである。

二つ目は、「主体と客体」また「主観と客観」である。「見ること」において、カメラが生成するイメージは客観的なのかという問題から、イメージを「見ること」や、鏡を「見ること」において、主体がどのような状態で「見る」のかという考察へとつながる。

三つ目は英語の文法のなかの主語と目的語としてのSubjectとObjectである。「見る」という行為を記述することを考えた場合、「見る主体」は主語として、「見られる対象」は目的語として文の中に現れ、文法が関係性を示すのである。

本論文と実制作は、相補的な関係にあり、両者を併せて以上の主題を探求する実験的なプロジェクト—Projectある。

プロローグでは、三つのSubjectとObjectとそのなかでの「いま・ここ・わたし」であるダイクシスの

ゆらぎをふまえて、エルンスト・マッハの《私の自画像》やディエゴ・ベラスケスの《ラス・メニーナス》を例に展開した。その中で「見ること」を視界という枠を通して対象を「写像」するものとして関数の考え方で捉え、「見る」状態の変化によって対象がテーマとしてのSubjectとモチーフとしてのObjectの間を遷移することについて、英文法の話法を用いて検証した。また、本論文と相補的な関係にある自身の作品で用いた三つのイメージ生成装置である「枠」「鏡」「カメラ」を挙げ、それらを「見ること」について整理した。

第1章「鏡を見る」では、プロローグを受けて、見ることと話法や関数の考え方の関わりを整理し定理を導いた上で、イメージ生成装置としての鏡を見ることの原理を解く。これは、修了作品へと展開する一連の映像作品に、鏡を登場させており、その解説をするための思考の台である。

第2章「イメージと実体」では、過去の映像作品を参考事例としながら自作round around the center of view (2007)および《あたたとわなし》(2007-2009)の解説や、ピーター・キャンパスの映像作品などを例に、カメラ、パフォーマー、制作者の視点とそれぞれのイメージの変容への関与について述べる。また、マイケル・ナウマンやディター・キースリングのインスタレーション作品を例に装置を見ることについての考察を踏まえ、博士修了作品へ直接的に発展させることとなった、自作《配置の森の住人と王様》(2010)の解説を行った。ここで、この作品で扱った「枠」を関数として捉えて記述するときに、関数の状態自体を変更するという考察を得た。さらに、「配置の森」という映像空間を英文法における直接話法の引用符の中で起こる出来事とし、それをカメラを通して見ることを直接話法として、この作品の鑑賞は、話法の引用符を自在にまたぐことであり、そのとき観察者の主体は変更されていたという考察を行った。

第3章「インスタレーションの実現」では、これまでの作品の集大成として展開した博士修了作品Observer=f(t, f(t, null), f(d, Observer, f(t, null), f(t, f(r, f(r, cameraE))), f(r, f(t, null))), f(r, f(Observer, f(d, f(r, f(r, null))))))の仕組みを詳説した。その中で「枠の両側から等距離にいる二人の人が向かい合う」ことと、作品の構成要素である九つの枠の中から重要な二つの配置である「等距離にある三つの平行な枠」「120°の関係を保つ三つの枠」について、具体的に実空間の中でどのように働き、関数としてどのように記述するのか解説した。

第4章「作品の詳細な分析」では、もう一度話法や関数としてとらえることの意味を振り返り、博士修了作品は空間の中にある特異な構造のイメージをつくる視点を見つけることが、鑑賞において重要であることを述べ、第3章をふまえていくつかの特異な視点について詳細に検証する。その中で、観察者は自身の「いま・ここ」の感覚がゆらぎ、空間に潜む論理を探りながら立ち位置を再確認するということが作品鑑賞時間に起こっていたと分かった。

本論文を通して、イメージ生成装置に観察者がどのように関与するのか、関数として捉え話法で表記することを思考の道具として、「見ること」における主体のゆらぎをテーマとしている。イメージ生成装置は多様で、高度に技術的な物も多く見られる。しかし、本論文では、原理を追求する姿勢でこの問いに取り組んだ。論文だけで成立するものではなく、自身が制作した作品とともにあり、自作の解説において用いた読み解きの方法を通じて、「見る」主体が客観を獲得する過程を巡って「見ること」とは何かという広くイメージについての表現をめぐる問題を扱った。

(論文審査結果の要旨)

津田道子の博士課程学位審査は、【研究作品】を中心とした審査であり、作品展示の評価と作品解説を中心とする論文の評価によって決定される。実際の作品制作展示は2012年10月末に行われた。展示は数

日間公開され、主査副査以外の学生、及び学外の関係する領域の研究者等も作品を体験することができた。その後、論文審査は、2月初頭に行われ、独自の手法を用いた自作の分析解釈が高く評価された。

津田は修了作品制作以来、映像の中に鏡を用いた作品を継続的に制作して来た。映像の中に鏡をとりこむことは、普段の現実の中で鏡を自由に見ることとは異なり、カメラを通して観客の視点を固定することができるので鏡の中と外のイメージの差異をわかりにくくすることができる。このことは、鏡の特徴を任意に抽出して提示することを可能し、鏡を表現の対象とすることを可能にする。博士課程期間中、津田はカメラと鏡の間にさまざまな関係性を作り出す作業を通して、一歩ずつその特性を拡張してきた。

中でも本論文では、「round around the center of view」、「あたとわなし」、「配置の森の住人と王様」を集中的に取り上げ、さらに博士課程審査展示では、その集大成をみごとに成し遂げた。「round around the center of view」は、鏡の前でカメラ付き携帯電話を回転させながら撮影する自分を撮影した作品である。「あたとわなし」は、部屋の中心線に鏡を置くことで、鏡の中に写る手前の壁が奥の壁とピッタリと位置合わせされて、まるで連続するよう見えるというトリックの部屋を用意し、そこにパーフォーマーを廃することで、意外にもそこに不連続性が出現するという作品である。これらは映像作品として制作されたのに対して「配置の森の住人と王様」は、大型の鏡を多数用いたインスタレーション作品になっている。しかしまた、記録として撮られた映像も独立した作品であるとしている。インスタレーションとすることで、フレーム付き大型鏡には滑車がついており、自由に移動させることができ、それぞれの配置によって特殊な関係性を作り出し、また変化させてゆくことができる。記録映像では数人のパーフォーマーがマジックのようにつぎつぎそうした特殊解を披露してゆくようになっている。

博士課程審査作品展示において公開した作品は、インスタレーションとして完成されており、個々の鏡や枠は特殊な配置として固定され、自由に歩き回る鑑賞者の視覚体験をいくつかの異なった方法によって、みごとに混乱させることに見事に成功している。課程期間中の作品制作姿勢として、またその集大成として高く評価できる。

論文において津田は、カメラのフレーム、鏡のフレーム、遡って人間の視覚（視線）もまたフレームとしてとらえ、そのフレームの中と外の関係、より詳細にはフレームの縁における連続性と不連続性の問題を、英文法における直接話法と間接話法の違いを使って分析解釈すると同時に、見ることをひとつの機能としてとらえ、対象を見ることを関数として扱うという手法を編み出し利用することで、これら複数の作品を分析することに成功している。

関数化による解釈では、鏡の中に写る撮影者とカメラといった階層構造を記述するには非常に便利であるが、主体の変化を記述することが難しいのに対して、話法を用いた解釈では、間接話法で書かれた一文を直接話法に開いた時点で、見ている（話している）行為者（主体）が誰であるかによって、話者の言説内の主語が変化してしまうので、鏡を見ている主体とその中に写っている客体（実は見ている本人）との関係、とくに鏡のフレームの効果を説明する上で非常に有効である。実際には、個々の作品においてこれら両方の分析方法を用いることで、見事な分析を行った。

実際の作品では、鏡と人間だけの問題ではなく、鏡の入っていない枠、映像をディスプレイする枠などがあり、さらにそこに固定されたカメラや自分以外の鑑賞者がいるわけであり、それぞれの状況の中で、それぞれの鑑賞者の立ち位置によって、その記述、分析の結果が変化してゆくことになる。すべてを記述することは不可能なので、個別の特殊事例をとりあげ、それについて詳細な解説を行なっている。現場に入った鑑賞者にとっては、これらの異なった状況が歩きまわることで緩やかに変化してゆくことも大きなファクターとなっており、単に分析ができたことで底が付いてしまう作品ではなく、長く飽きを感じさせない作品となっている。

以上、最終的な作品の制作展示における完成度、論文における自作を分析する手法の鮮やかさ、どちらもともに十分に高度な完成度を持っており、博士後期課程学位に値する。